



目次

- ・ 2020年度京機会総会報告…… (pp. 1-4)
- ・ 祝：大槻幸雄氏(S29/1954卒)の自動車殿堂入り…… (p. 5)
- ・ series わたしの仕事(12)東レ……内藤悠太 (pp. 6-12)
- ・ 百万遍周辺探訪(その1)応用科学研究所……吉田英生 (pp. 13-16)
- ・ 「小菊物語」(その1)……並木宏徳 (p. 17)
- ・ 桂キャンパスC3棟 COFFEE BREAKのご案内……石川理沙 (p. 18)
- ・ 昭和46年卒(昭和42年入学 教養部T-10組)第5回 同窓会報告……清水 明 (p. 19)
- ・ S42関東同期会……長崎 啓、藤川卓爾 (p. 20)
- ・ 昭和53年卒学年同窓会……上原一浩 (p. 21)

2020年度 京機会総会報告

文章：黒瀬良一 (H5/1993卒)

写真：小森雅晴 (H7/1995卒)

土屋智由 (H3/1991卒)



日 時：2019年11月2日(土)

会 場：京都大学吉田キャンパス

幹事会：物理系校舎312室(出席者47名)

総 会：物理系校舎313室(出席者96名)

講演会：物理系校舎313室(出席者116名)

懇親会：時計台百周年記念会館 国際交流ホールⅢ(出席者91名)

2020年度京機会総会は、11月2日(土)に京都大学の吉田キャンパスにある、物理系校舎、及び百周年記念会館 国際交流ホールにて開催されました。参加者は、ご家族も含め、総勢122名でした。

総会に先駆けて開催された全体幹事会では、会計の報告と新役員候補の紹介がなされ、総会への提出が承認されました。また、京機会活動に関する意見が紹介され、活発な意見交換が行われました。



2020年度総会は、蓮尾昌裕代表幹事（1986卒）の司会によって行われました。塩路昌宏会長（1975卒）の挨拶で始まり、続いて、鈴木基史工学研究科副研究科長（1986卒）より教室の現状報告がなされました。

その後、来年3月に定年退職予定の教員2名、今年転出・移動された教員6名、新任教員6名、昇任教員6名の紹介が行われました。



2019年度の活動報告では、支部の協力による工場見学の実施、脇坂資金による学生の留学補助、学生と先輩の交流会、学生フォーミュラー活動、社会貢献の取り組み（高校への出張講義）、ニュースレターなどが紹介されました。続いて、鈴木基史会計幹事から2019年度決算報告があり、鴻野雄一郎氏（1969卒）による監査報告がおこなわれ、承認されました。

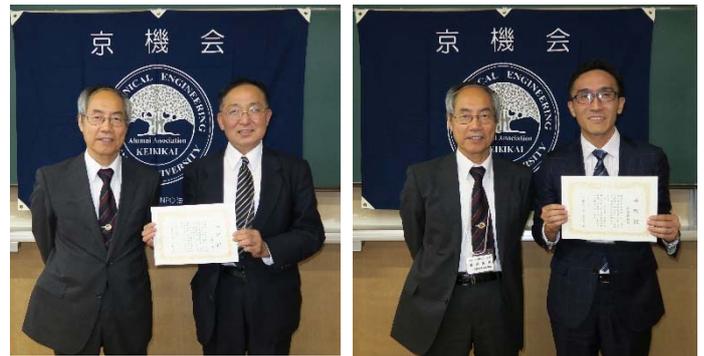
次に塩路昌宏氏が会長に再任され、副会長案が承認されました。引続き、新役員が報告されました（詳細は最後尾記載）。

その後、西脇眞二新代表幹事（1986卒）から2020年度の活動予定、鈴木基史前会計幹事から2020年度の予算が紹介され、予算が承認されました。



支部報告では、関西、関東、中部、中国四国、九州、それぞれの支部が、それぞれの特色を生かした活動の報告が行われました。関西支部では、異業種交流会、産学懇話会、京機カフェなどの取り組み、および同窓会活動の試みなどが紹介されました。関東支部では、新人歓迎会、工場見学会、ゴルフ会、写真同好会の活動などが紹介されました。中部支部では、「ココロ動かす」活動、若手の会、技術交流会、学生工場見学会、巧の技見学会などが紹介されました。中国四国支部では、見学会、異業種交流会などが報告されました。九州支部では、九州支部の特徴、高校への出前講義や、工場見学会の活動などが紹介されました。

次に、京機会の2019年度の年間活動に顕著なご貢献を頂いた千々木 亨氏（1979卒）への会長賞、ならびに支部推薦の5名への活動優秀賞の表彰が行われました。ご欠席の受賞者については、各支部からの代理の方に賞状を受領いただきました。



最後に、今後の本部行事と来年度の総会の案内があり、閉会しました。



続く特別講演では、「不便だからこそ益があるシステムの設計」と題して、川上浩司氏（1987卒）（情報学研究科 特定教授 <http://fuben-eki.jp/masterpiece/>）より講演がありました。講演では、便利・不便、益・害とは何か、不便で良かった

ことやご自身が不便益認定した例、不便益の効用、システム設計への応用などをユニークにお話されました。講演では、学生の参加もあり、「勉強に役立つ不便益はないか?」、「便利⇔不便、益⇔害の4象限のそれぞれの割合はどれぐらいか?」などの質問も出て、大変盛況でした。

その後、会場を国際交流ホールに移して、西脇真二代表幹事の司会で懇親会を開催しました。塩路昌宏会長にご挨拶いただいた後、下間頼一氏（1950卒）の乾杯のご発声により、会が始まりました。しばしの歓談の後、KARTからの本年度活動報告があり、その後、「琵琶湖周航の歌」を参加者全員で合唱しました。



最後に、松原 厚マイクロエンジニアリング専攻長（1985卒）よりご挨拶をいただき、総会が終了しました。



祝 大槻幸雄氏（S29/1954卒）の日本自動車殿堂入り



（2019年11月15日 学士会館にて、後方右上の写真が大槻氏）

大槻幸雄氏が、自動車産業・学術・文化などの発展に寄与し豊かな自動車社会の構築に寄与した人々を讃える日本自動車殿堂（<http://www.jahfa.jp/>）入りされ、11月15日に学士会館で表彰式が執り行われました。誠にありがとうございます。

顕彰理由は「大型二輪車の開発によりカワサキブランドを確立」で、大型二輪車の開発において優れた加速性能および最高速度を実現し、また排ガス規制対応のため2ストロークから4ストロークへの転換を図り、カワサキオートバイのブランドを確立するとともに、ガスタービン研究に優れた業績を残されました。

日本自動車殿堂には、2001年から豊田喜一郎氏や本田宗一郎氏らをはじめとして、今回で80名の方々が顕彰されています。生誕順では橋本増治郎（1875-1944）氏など故人も対象となっており、文字通り日本自動車界を代表する方々の殿堂（Hall of Fame）です。

なお、大槻氏による関連内容の連載として、京機短信のバックナンバー299号、301号、302号、303号（<http://www.keikikai.jp/tanshin/tanshin1.html>）に「川崎重工におけるオートバイの開発と純国産ガスタービンの開発について」が掲載されておりますので、あわせてご覧いただければ幸いです。

series わたしの仕事 (12) 東レ

内藤悠太 (H25/2013卒)



○はじめに

いつものことながら、突然北條先生からメールがあり、何かと思って開いてみると、京機短信への投稿依頼でした。何を書こうかとても悩んだのですが、率直に考えて皆様に有益な情報になるような、そこまでの人生経験はありません。ということで、最近の私自身の近況について、ざっと紹介したいと思います。

○自己紹介

私は、学部・修士ともに北條研（適応材料力学研究室）のお世話になり、その後、東レ株式会社（以下、東レ）に入社。入社から5年目の現在まで複合材料研究所にて働いています。また、昨年からは北條研に社会人博士としてお世話になっています。東レは、合成繊維・合成樹脂をはじめとする大手素材メーカーで、炭素繊維の売上ではトップシェアを獲得しています。北條研も複合材料研究所も、炭素繊維をベースとした複合材料である炭素繊維強化プラスチック（以下、CFRP）を研究しており、まさにCFRPにべったりなキャリアを歩んでいます。

さぞかし昔から材料力学、あるいはCFRPが好きなんだろうというとなんなわけでもなく、むしろ研究室に入るまでCFRPのことをほとんど知りませんでした。実はもともと小学生から学部卒業まで、もっぱら野球ばかりで、京都大学を選んだ理由も、所属リーグの他大学が甲子園ボーイだらけの超強豪だからという、まったく学問に関係のないもので、足りない成績を浪人生活で補って京都大学に入学しました。ポジションは投手だったのですが、入学後は能力の高すぎる他大学の打者との対戦を思う存分楽しむことができました。さらには、まさかのキューバのナショナルチームと対戦する機会もあり、WBCで見たことのある選手や、後にメ



(キューバ代表との試合の写真。試合後、ストレートとカーブを褒めてもらったのは、今でも覚えています！)

ジャーで新人王をとった選手や4番をはった選手に、4イニングの間コテンパンに打たれたのを今でもよく覚えています（一応しっかり0点で抑えたイニングもあります！）。打たれた思い出がやや多めではありますが、とても充実した野球生活を送ることができました。

その後、野球を引退し研究生生活が始まるのですが、最初は完全に目標を見失い、ふらふらしていました（しんどい時期でした）。ですが、北條先生、西川先生に材料研究の楽しさを教えていただき、すぐに第2の人生が始まったように思います。

学部、修士時代は、形状記憶ポリマーを使用した複合材料のモデリングをテーマに研究していました。このテーマを選んだ理由も、“形状記憶ってなんか凄そう”という非常に稚拙なものでした。メーカーから“形状記憶複合材料”そのものを手に入れることができなかつたこともあり、試行錯誤の成形から実験、そしてシミュレーションまで、自分の手で進められたこと、そして複雑な現象を、材料力学できちんとモデル化できた感動が、現在東レという材料メーカーで働いている1つの理由かもしれません。今振り返っても本当に楽しい研究生生活だったと思います。また、先生方の勧めもあり、修士2回生の終わりにFirst Authorとして、論文の執筆も経験させていただきました。慣れない英語での執筆、大量の査読者コメントへの対応など、大変苦勞しましたが、西川先生の強力なサポートを得つつ、なんとか複合材料系のトップクラスのジャーナルである“Composites Part A”への掲載許可をいただくことができました。論文を掲載できた喜びとともに、いかに学術界の論文の質を上げるために多くの研究者が無償である査読のプロセスを丁寧に取り組んでいるのか、強く実感できました。論文がアクセプトされた際に西川先生からもらった、「ひとまず、研究者の仲間入りですね」というコメントは今でも忘れられないです。



（北條先生、研究室の同期と。卒業祝いは“デゴイチ”というレストランで。左から2番目が筆者。）

○東レでの仕事

自己紹介で述べた通り、入社～5年目の現在も引き続き、複合材料研究所に所属しています。なぜ材料系の研究所に機械系出身の私が研究者として所属しているのか、不思議に思う方もいると思います。実際、東レの中でも、機械系出身の研究者がいるのは、おそらく複合材料研究所のみだと思います。この理由は、材料の特性に起因していて、CFRPは、単純に方向によって物性の異なる異方性材料というだけでなく、炭素繊維と樹脂という、特性が極めて異なる材料で構成された、いわば内部に機械的な構造を有するような材料です。単に構成要素の物性を上げれば、CFRPとしての物性が上がるというわけではないため、その点で炭素繊維、樹脂、そしてその界面の特性を材料力学、破壊力学の観点で考察できる機械系研究者が材料設計の観点からも重宝されます。また、最近ではCFRPの適用範囲が拡大するにつれて、強度や弾性率の高いCFRPが欲しいというものから、複雑な形状を成形しやすいCFRPの母材が欲しいという、プロセス性も視野に入れた要望も増えてきています。CFRPの製造プロセスを鑑みると考慮に入れなければいけないファクターはさらに増えていき、製造途中の型内の温度分布（伝熱工学）や、熱せられて流体状態となった樹脂の挙動（流体力学）など、機械系の活躍の場も増えていきます。

入社後、私はその機械系の研究者が集められたメカニクスグループと呼ばれるグループに配属となりました。研究所の中ではやや特殊で、力学をベースとした材料設計とともに技術サポートをメインとするグループです。まさになんでも屋のようなイメージで、自身のグループの研究活動をただ遂行するだけではなく、研究所内外問わず様々な技術サポートの依頼にも対応します。入社したばかりのころは、本当に力学屋は材料の研究所に必要なのか半信半疑ではあったのですが、先輩方の獅子奮迅の活躍を見て、その疑問は一気に解消したように思います。私も同様に、両方の業務を行っていて、新しいCFRPの母材の研究をしつつ、時にはお客様の下へ、研究した材料をどう使うのか、あるいはどういういい特性があるのか、直接説明しに行くこともあります。外へ出る機会は、提案した材料をよりよく使ってもらえるようになるだけでなく、お客様の生のニーズを得ることができる場でもあり、私の研究サイクルにとっても有益なものとなっています。

○職場の風土

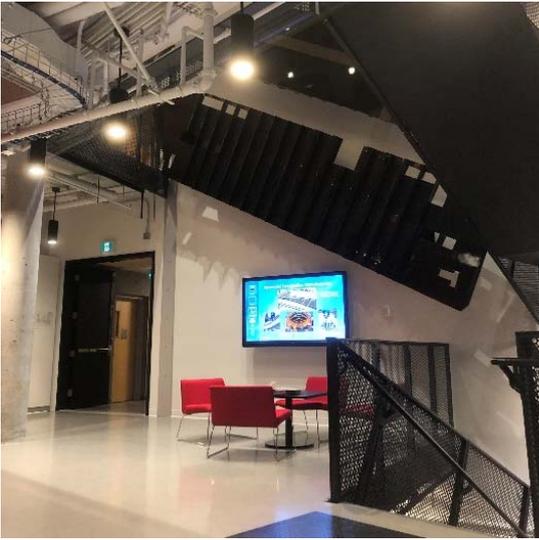
私自身、入社前から東レの風土についていろいろ話を聞いてきました。特に、北條先生からは、「東レは人を大切に育てる企業」だということを何度も伝えていただいたように思います。結論から申しますと、これはイエスだと思います。社内では、若手の内からたくさん成長の機会があります。社員で講師を回す勉強会、社内での英語のプレゼンテーション、様々な分野の講習会などといった練習・勉強の場だけでなく、海外の有名教授とのディスカッション、国際会議での発表などといった対外試合まで、たくさん経験することができます。その分業務へあてる時間が短くなってしまいうこともありますが、むしろ上司の方々がこういった場への参加をどんどん奨励してくれる風土があります。

もともと私は、自分への自信のなさもあって消極的な方ではあったのですが、上司がどんどんこういった機会を私にぶつけてくれました。1年目のはじめにいきなり海外の有名な教授にプレゼンをする機会をもらったのをきっかけとし、業務においても早いうちからテーマリーダーとしてテーマを任せてもらいました。失敗したことも多々あったのですが、失敗したことよりも、挑戦したこと、よかったところに目を向けたアドバイスをもらえ、徐々に私自身の意識も変わってきたように思います。

○留学生活

唐突ですが、実は今年の8月から現在進行形でカナダのUBC（University of British Columbia）へ留学をしています。もともと海外留学をしたいという気持ちは持っていたわけではなく、会社での様々な成長の場を経て、外に出て自分の力を試してみたくなったというのがきっかけで、また国際会議に初めて出たときに感じた、海外研究者との壁を取り除きたいという気持ちによって、海外留学への希望がより強くなったように思います。

UBCは、航空機向けの成形プロセスのシミュレーションに強い大学です。航空機メーカー二強の一角であるボーイングへの貢献の大きさから、B777Xの主翼が大学内に飾られていたりします。私自身、プロセスの影響を材料設計に反映させたいという気持ちもあって、UBCの研究に強い興味があり、留学することとなりました。充実した研究設備、優秀な先生方、生徒たちに囲まれて、充実した研究生活を送ることができています。



(B777Xの主翼のカットサンプル。研究室建屋の入り口近くに展示されています。)

カナダ、特に今いるバンクーバーは、日本人留学生も多いこともあり、日本人にとって非常に住みやすい環境です。米、うどん、しょうゆをはじめとし、わさびや明太子、納豆までも簡単に手に入ります。北米の方は「キットカット」が好きということを知り、日本の限定キットカットであれば大丈夫だろうと、お土産に持って行ったところ、普通にスーパーで売っていたのには驚愕しました。。(ちなみに、つい最近「東京ばな奈」を売っているのも見かけました。値段は日本の3倍ほどですが。) また、ダウンタウンやブロードウェイは、ラーメン屋さん、お寿司屋さんがいっぱいあります。特にお寿司屋さんは、どちらかというカナダ料理と言っていけるくらい、日本とは異なるカナダスタイルを確立しています。食生活には、ほとんど困ることはありませんが、一方で外食は全体的に高いので必然的に自炊をしています。これまで料理をした経験がほとんどなかったのですが、料理作りの面白いこと！研究と一緒に、創意工夫することで、豊かな食生活がとても安価に手に入ります。留学後も趣味として続けていきたいなと思います。

英語については、京機短信の先輩方もたくさん記載されていますので、私も便乗して思っていることを書きたいと思います。こちらに来て特に実感したのは、自分自身の英語に対する認識の甘さです。これまでの経験から、研究を進めていく上でのコミュニケーションやディスカッションで大事なものは、語学というよりは専門性や内容の筋だという認識もあり、日本語のとき以上に準備は必要ではありませんが特に不自由なく進められています。ただし、これも相手が聞いてくれる環境にあるから成り立っているものなのだと、先生方や同僚たちが注意して私の

発言を聞いてくれる様子を見て日に日に感じるようになりました。聞き取りづらい英語は、少なからず相手にとってストレスを与えているように思います。日本人の英語は、ネイティブの方からすると非常に聞き取りづらいものらしく、実際短いセンテンスでも聞き返されることは何度もあります。試しにgoogle翻訳のスマホアプリで英単語を発してみると、見事に違う単語が表示されました。。。これまで発音についてはあまり意識していませんでしたが、留学を通じて練習するようになりました。単にディスカッションができるだけではなく、真の意味でよいコミュニケーションがとれるように日々努力を続けたいと思います。



(UBCの研究室の先生と同僚たちと。)

○社会人博士課程

最後に、現在履修中の博士課程についてです。なぜ社会人になってから再度博士課程に進みたくなったかという、単純に大学でもう一度勉強したいという気持ちが大きかったように思います。修士時代はどちらかという自分の研究対象のみに集中していたところがあり、社会人生活を通じて、実学の中での経験をたくさん得てきました。そういった経験を得た上で、もう一度大学での研究を自分自身で上乗せするとどういうことができるのか、やってみたいと思ったというの

が一番の理由です。

会社も、社会人博士の取得を奨励してくれていたおかげで、3年目の頃に会社をお願いしたにもかかわらず、すんなり4年目から始めることができました。学費は自費で、余暇の時間も当然少なくなっていますが、1年半あまりの履修を通じて間違いなく3年目のころと比べ成長を実感できており、この決断が早いうちにできて本当によかったと感じています。今後も北條先生、西川先生の下でたくさん勉強させてもらいます！

○最後に

あまりメッセージ性のない短信となってしまい申し訳ございませんでした！特に計画性もなく、行き当たりばったりな人生を送っていますが、毎日充実した生活を送ることができているということは言えると思います。10年後どんな人生経験を語るができるのか、自分としても楽しみに毎日元気に過ごしたいと思います。

百万遍周辺探訪（その1）応用科学研究所

吉田英生（S53/1978卒）

1. はじめに

京大といえば、一般の方々には、まず時計台が思い浮かぶと思いますが、京大で学生生活を送られたみなさまには、むしろ百万遍交差点をはじめとする京大周辺の空間の方がずっと日常的に大切に思い出深いのではないのでしょうか？ 京機短信No. 315(2018年7月 http://www.keikikai.jp/tanshin/tanshin_no315.pdf)では、タテカン撤去問題に関連して百万遍交差点の古い写真をご紹介しましたが、現在の姿は以下の4枚の写真（数学平面の第1象限から第4象限に対応させています）のようです。百万遍交差点は、かつて（1978年9月30日まで）市電が縦横に交差していたこともあり、「面取り」加工されて巨大な空間です。第2象限にあった1953年開店のパチンコ屋MONAKOは2016年4月30日に閉店しましたが、第1～3象限には、ファーストフードのチェーン店が勢ぞろいし、まさに京大生の街—百万遍を今風に象徴しているともいえます。一方、みずほ銀行百万遍支店は出町柳支店に統合されて、ATMだけが体育館前に残されたのは寂しく不便でもあります。



マクドナルド、セブン-イレブン、サイゼリア、王将、吉野家、すき家



総代麺家あくた川、郵便局、じゃんぼ総本店、串八



LAWSON、かぎや政秋、ダイコク、KFC、松屋、CoCo壱番屋

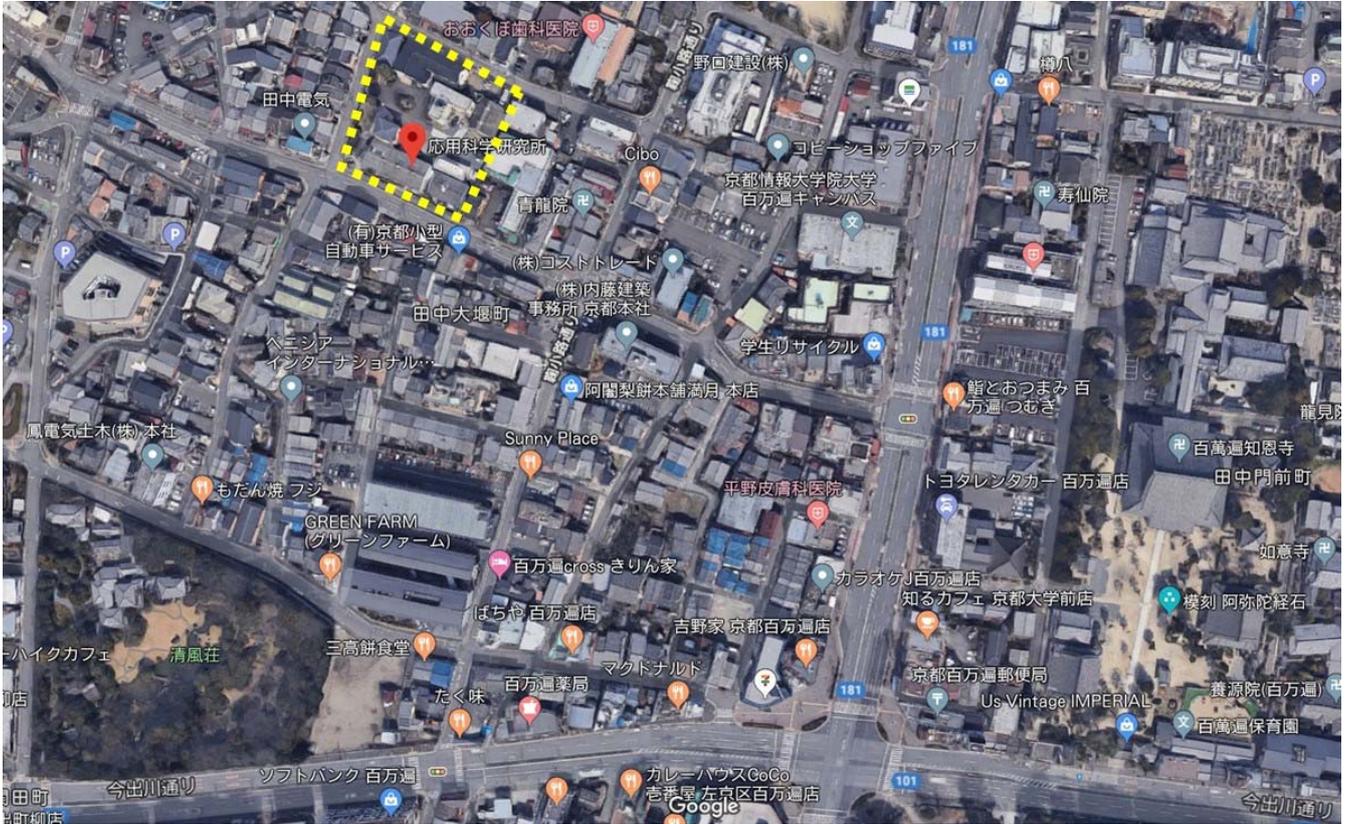


2018年5月には、タテカン撤去に対抗し皮肉った「ござっぱりとしてはる。」という名タテカンも

本連載では、そのような百万遍周辺のいくつかの地点にスポットライトを当ててみたいと思います。読者のみなさまの中には、筆者の付け焼刃的知識よりもっと詳しくご存じのところも多いと思いますが、逆に盲点となっているところも若干あるかもしれません。初回は、おそらく大多数のみなさまには後者ではないかと想像される公益財団法人 応用科学研究所（<https://www.rias.or.jp>）です。

2. エジソンに感銘を受けた本学電気工学科教授により設立された研究所

まずは研究所の場所から確認しましょう。第2象限で阿闍梨餅本舗 京菓子司 満月本店（1856年創業）から少し西側にある、周囲からは少し違和感のある塙で囲まれた町工場のような建物が応用科学研究所です（下の写真で黄色の点線）。

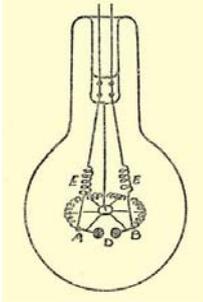


この研究所は1917年11月8日に、本学電気工学科教授の青柳栄司（1873–1944）により設立され、当初は財団法人青柳研究所という名称でした。その設立動機は、青柳が1916年10月19日にニューヨーク郊外のエジソン研究所を訪問した際、当時70歳のエジソン翁のまだ矍鑠（かくしゃく）として日夜を分かたず研究を続けられていることに感動した

ことに端を発し、

明治の文化を白熱電灯の方面から述べると、今日電灯を使用して誰一人便利でないと思うものはないが、その電灯の発明以来、現在に及ぶ発明家並びに研究家の奮闘、努力を思うにつけ、これによって享（う）けたる恩沢のあつきを感ずるにつけ、電灯に限らず何にしても自己の能力に適應せる仕事を成し遂げて、いわゆる報恩謝徳の意味において世界の文化に対して寄与するところがなくてはならない。また電灯の発明に関して、その大恩人たるエジソン氏は、人生の目的として社会に尽くすにあたり、学者としてよりも発明家として立つほうが更に適當であることを自覚していた

ことから、社会に貢献することの重要さを痛感し、研究所の設立を強く意図したことにあります。



当初の研究対象は、電熱織条（せんじょう＝フィラメント）の製作、高温度用電気炉の製作でしたが、1921年以降にはタングステン織条製造法、熱電式真空計、低圧ガス入電球、白熱孤光（アーク）電灯などに拡張されました。

青柳の指導の下に、この孤光電灯を改良して太陽光線に近づけたのが電気工学科を卒業したばかりの若い松田長三郎（1894–1991、後に本学教授）で、この発明に対し恩賜発明奨励金が授与されました。そこで、この交付金を元とし、寄付金や研究活動での利益金合計5,000円で100坪余りの記念研究棟が1934年、現在の田中大堰町の約1000坪の土地に新築されたのです（なお、この土地については、青柳研究所の評議員でもあった三井の重役 牧田環からの借地でしたが、1939年に牧田から青柳研究所に寄付されました）。

3. 鳥養利三郎第2代理事長により応用科学研究所に改称・改組



京大の歴代総長の中でも、ひととき偉大な総長（1945–1951）が鳥養利三郎（1887–1976）ではないでしょうか¹。1938年に病気で倒れた青柳は鳥養に（経営難でもあった）研究所の後事を相談し、翌1939年に鳥養が第2代理事長に就任します。

これには、当時、鳥養が日本高周波重工業株式会社城津工場を視察した際、同社の高橋省三より高周波精錬法に関する研究を委託され、これに付帯して同社の「東京応用科学研究所（所長 菊池秀之）」で行われていた研究も引き継いでもらいたいとの申出があったことが関係しています。このような背景から、青柳は鳥養に理事長を譲り、1939年11月16日にこれまでの「青柳研究所」は「応用科学研究所」に改称・改組されることとなったのです。

改組の理由は下記のように記されています。

本研究所は従来設立者工学博士青柳栄司の専攻学科たる電気工学に関する研究にその主力を集中し今日に至れり。然るに時局は資源開発、特に各種金属材料、各種化学製品等の確保を切望せるを以て本研究所もこの国家的要望に副（そ）わんが為め、今後其の内容の充実を図るは勿論、従来の名称の儘では其の研究内容に関して誤解を受けくる虞（おそれ）あるのみならず

¹ かの桑原武夫も「つい最近亡くなった鳥養利三郎先生、総長ですが、これは電気工学の大家ですけれども、総長としてもものすごくえらい人だと私は思います」と述べています。（「学問の世界——碩学に聞く」、加藤秀俊、小松左京、編講談社現代新書 1978、講談社学術文庫 2002）

寄付行為第八条による協力者を得ること困難なり。以上の理由により本研究所の名称を変更せんとす。

この改組で以下のように工学全体を広くカバーする体制となりました：

理事長	鳥養利三郎	京都帝国大学教授（電気工学）
理事	青柳 栄司	京都帝国大学名誉教授（電気工学）
理事	大藤 高彦	京都帝国大学名誉教授（土木工学）
理事	斎藤 大吉	京都帝国大学名誉教授（冶金工学）

また、専門の学者には下記の研究指導を委嘱しました：

冶金・金属関係	工博	西村 秀雄	化学関係	工博	中沢 良夫
電気関係	工博	阿部 清		工博	澤井郁太郎
	工博	林 重憲	物理関係	理博	吉田卯三郎
機械関係	工博	西原 利夫			

4. 高周波応用を中心とするその後の研究展開

高圧放電作用に関する大家であった鳥養の下で、新たに展開された研究テーマは、高周波電流発生装置の研究、高周波ならびに低周波電流による製鋼法の研究、半導体—特にセレン整流体の研究などでした。応用科学研究所が日本における高周波焼入れ技術の発祥の地で、この技術は80年後の現在でも同研究所の重要な柱となっています。

その後の研究展開の詳細は、京機短信の記事ということもあり省略させていただきますが、1975年ごろからプラズマ窒化による機械構成部品の表面改質も新たな柱に加わり、研究のみならず収益事業としても現在にいたっています。なお、同研究所は2011年4月1日に公益財団法人となったため収支相償の制約の中で活動を続けています。

京機会との関連では、久保愛三（S41/1966卒）が2019年6月19日から理事長に就任し、また同研究所の評議員の一人である森雅彦（S60/1985卒）が社長を務めるDMG森精機株式会社からの強力なバックアップも特筆すべきことといえます。このように京機会とも関わりの深い応用科学研究所を、百万遍や出町柳周辺に行かれた際に、覗いてみられてはいかがでしょうか？（事務局は正門前方のベージュ色の建物1階にあります。写真では右側の木の奥です。）



（本文中では敬称を省略させていただきました。また「公益財団法人 応用科学研究所の100年 <https://www.rias.or.jp/uploads/100th%20anniversary.pdf>」から文章の一部や写真を引用・転載させていただきました。）

「小菊物語」(その1)

並木宏徳 (S44/1969卒) KIR監事

京機会の会員が創設したNPO法人・京都イノベーション・リソース(以下KIRと呼びます)は、産業社会の構造的な変革に必要なアントレプレナーを輩出するプラットフォームを構築すべく立ち上げた任意団体・京機会MOTセンター(KMC)が発展して法人成りした団体です。

とは云え構成会員は大学や大企業を定年退職した方が主ですので、アントレプレナー輩出というより、第二の人生を構築するプラットフォームを指向する方向に流れていったのは自然な成り行きでしょう。その中で異色の活躍をされている方をご紹介します。

KIR会員で現役時代には技術者だった方(京大工衛生1970年卒)が小説を出版されました。風史伝「小菊物語」、発行:銀河書籍、発売:星雲社、ISBN978-4-434-26676-8:定価(本体1,635円+税)がそれで、執筆されたのはペンネーム・自然海遠(じねんかいえん)氏で、母方の曾祖母にあたる「小菊」さんを主人公とした歴史小説です。KIRのご縁で、大阪文学学校で教鞭をとられている天野到氏(京大工機1965年卒:ペンネーム森口透氏)のご指導もあって出版にまで漕ぎつけられたと聞いております。一部店頭では好評で品切れにもなったそうですので、ひよっとしたら文学賞も!ご一読をお勧めいたします。なお、KIRに参加希望の方は次のHPからお問合せ下さい。お待ちしております。<http://kir.or.jp> その2に続く



桂キャンパスC3棟 COFFEE BREAKのご案内

石川理沙 (H31/2019卒)

週1回程度、C3棟1Fカフェテリアでコーヒブレイクを開催しています。日時は毎週金曜日の15時～16時です。12月は第2週に特別企画も予定しています。1杯のコーヒーを交えながら、研究や講義の合間に、研究室の垣根を超えた休憩をしませんか？（お持ちの方は、myマグカップを持参いただくと幸いです。）

C3 COFFEE BREAK

SUN	MON	TUE	WED	THU	FRI	SAT
1	2	3	4	5	6 ☕	7
8	9	10	11	12	13 ☕	14
15	16	<div style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 10px; display: inline-block;"> <p style="margin: 0;">特別企画 </p> <p style="margin: 0;">「企業における研究所の役割」 という題で三菱電機の方に講演 いただきます</p> </div>		19	20 ☕	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30	31				

December
15:00-16:00
@ soleil (c食堂)

☕ が開催日

昭和46年卒（昭和42年入学 教養部T-10組）第5回 同窓会報告

清水 明（S46/1971卒）

日時：令和元年11月6日（水）17:30～20:00

場所：京都大学 吉田キャンパス時計台内 レストラン ラ・トゥール

出席者：8名

一昨年に長楽館で第4回同窓会を開催しましたので、今回は第5回です。会場は京都大学の時計台内のレストランで単身4名と、夫婦2組の参加で夕食会を催しました。今年は全員が古希を迎え、体調を含めた近況報告や今回海外旅行等で急遽欠席になったメンバーの現状報告がありました。今回は会場が学生時代を過ごした京都大学吉田キャンパスということで、講義室、研究室があった建物の現状を見るつもりでしたが、さすがに卒業以来48年が経ち新しい建物に建て替わっており残念な思いと共に今の学生は設備の整った設備で勉学ができるということをうらやましく感じました。夕食会に先立ち京大総合博物館を訪問し、京都近くの遺跡で発掘された石棺などの展示物と、たぶん工学部物理工学科から寄贈されたのであろう創設期の京大で教材として使われた機械メカニズム模型等を見学しました。幸運だったのは、博物館が70歳以上は入場無料で、今回全員がそれに該当していたことです。次回開催は再来年を予定しています。T-10の皆さん是非御参加下さい。



（後列）：杉本、高橋、清水、増田（幹事）

（前列）：原田、森、清水、増田

S42 関東同期会

長崎 啓、藤川卓爾 (S42/1967卒)

本年もS42卒 (S38入学) 関東同期会 愛称「金時会」が春と秋に開催されました。春は5月17日に10人、秋は11月15日に14人集まりました。近況報告や学生時代の思い出が話題になりました。来春の予定は5月15日 (金) です。



春の「金時会」

(左から) 小野隆士、安藤研治、渡邊光寛、間瀬俊明、前野幹彦、平尾隆、古川遵、元木敏雄、長崎啓、金時の女将、側島克信



秋の「金時会」

(後列) 前野幹彦、間瀬俊明、岡 毅遥、平尾 隆、小野隆士、若園 修、元木敏雄、西村喜之
(前列) 檜村 勝、安藤研治、林 正広、古川遵、藤川卓爾、長崎 啓

昭和53年卒学年同窓会

上原一浩（S53/1978卒）

11月24日（日）に京都百万遍の「くれしま」で、卒業以来6回目の学年同窓会を行い、19名の同窓生が集まりました。

出席者は下記のとおりです。（順不同、敬称略）

石山 拓二、奥平 有三、岡部 好男、鎌居健一郎、櫻井 隆、沢田 祐造、千葉 喜一、
名定 正孝、長野 寛之、西田信一郎、仁張 修、野村 真三、福尾 幸一、政友 弘明、
宮内 直、森 敏雄、矢野 誠、北川 聡一、上原 一浩

皆 近況を伝えあいましたが、定年を迎える年代となり、今後の身の振り方や年金の話などが出ました。また健康面の話や未婚の子供のこと、親の死に伴う苦勞などの話題も出て、同窓会ならではの情報交換の場になりました。最後に皆で琵琶湖周航の歌を歌って散会しました。

あっという間に時間が過ぎ去る 楽しいひと時を過ごしました。

